終わりなき

Meyrin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終わりなき

【Ｎコード】
Ｎ２８７３Ｅ

【作者名】
Ｍｅｙｒｉｎ

【あらすじ】
作者の夢に出てきた話を小説化！！謎の研究所と謎の生物の正体とは？！？！

Ｐａｇｅ０１　†　夏休み（前書き）

グロい系苦手なかたは観覧をおやめください。

観覧は自己責任でお願いします。

Page01　†　夏休み

２０ＸＸ年７月〇日…

ここは最近できたばかりのキャンプ場。

そこに私の家族も来ていた。

私のお母さん（斎藤（さいとう）　恵理（えり））と私（斎藤（さいとう）　綾（あや））、そして家族ぐるみで仲よくしていた

沢木（さわき）一家。

沢木一家は４人家族。

長男の学（まなぶ）、長女の桃（もも）。この２人と私は小さい頃からとても仲良しだった。

この二家族は夏休みを満喫しようとキャンプ場に来ていた。

私たちの他にもたくさんの家族でキャンプ場はにぎわっていた。

山の近くにあるこのキャンプ場は特に良いと評判だった。

人気の理由…。それはキャンプ場を利用した人なら無料で使うことができる

温泉施設。

とてもきれいで広いお風呂だと聞いていた。

私たちは駐車場からほど遠くないところにテントを張った。

あまりいい場所ではないが、荷物の出し入れがしやすいからだ。

テントを張り終えると私と学、桃は車にバーベキューセットを取りに行った。

食材やコンロなどは全部合わせるとかなりの量になって、3人で持っても1人分が

かなり重い。

3人の中で1番年上、高校2年の学が桃と私の分を少し持ってくれた。

それでもやっぱり重くて…体の小さい私には少しキツかった。

桃「綾はゆっくりおいでよ。私たちが先に行って荷物置いて…そしたら手伝いに
くるからさぁっ！」
綾「うん。ありがと。少しずつ運んどくね。」
桃「うんっ！じゃあ桃たちは先行くね～」
そう言って桃と学は先に荷物を置きに行った。
私は休みながら少しずつ荷物を運ぶ。
その時、車の陰でひそひそと話をしている男2人が目にはいった。
このキャンプ場で親子連れじゃないなんて珍しい…。
1人は30代半ば、もう1人は20代前半って感じだが、キャンプに来ているような雰囲気ではなかった。
若い方の人は大きくて重そうなケースを持っている。
私は場違いな2人に興味を持って、しばらく2人を観察していた。
男1「はぁ…被害はどのくらいになるとお考えです？」
男2「被害は決して出してはならない。」

男1「はぁ…博士…キャンプ場にいるすべての人を1度に避難させるのは無理です。

事情を伝えると必ず混乱が起きる。」

男2「私たちには責任がある！！」

男1「――――…博士、時間がありません。研究所はもってあと15分でしょう。

私たちだけでも避難を…」

男2「君は何を言っ…」

桃「あ～～～～や～～～～～！！！！！

んも～。ゆっくり過ぎ！！さっきから5mくらいしか前に進んでないじゃん！！」

桃が走って私に近づいてくる。

綾「あ…ごめ…」

桃「も～！！いいよ！！

ほら、早くいこっ！！みんな待ってるから。」

綾「う…うん…」

私はさっきの男たちの会話が気になりながらも、桃にせかされて荷物を運んだ。

Page02 † 黒

テントの隣ではコンロの用意がもうできていて、ウインナーを焼いているところだった。

学は火加減を見ながらウインナーを鉄板の上で転がしている。

学「お！！綾がきた！！そのダンボールに入ってる肉と野菜出せよ。早く焼いて食べるぞ！！」

そう言いながら私の運んできた大きいダンボールを指さす。

私が食材をすべて出すころにはウインナーはいい感じに焼けていた。

綾「1個食～べよっと！」

そう言って私がウインナーに手を伸ばしたその時…周りが騒がしいことに気づいた。

キャンプ場にいる人のほとんどが同じ方向を指さして何かしゃべっている。

指さしてる方向は、たぶん駐車場の方だろう。

私もみんなにつられてその方向を見る――――…。

私の体に悪寒が走った。

みんなが指をさしている方の空に何やら黒い物体が見える。

そしてソレはどんどんキャンプ場の方に近づいて来ている。

よく見ると黒い大きな1つの物体というよりも、小さいものがたくさん集まって

いるようだ。

周りでは桃や学、お母さんまで口を開けてそれを見ていた。

綾「なんなの…アレ…」

学「まぢかよ…あの数…」

桃「やっぱり…こっちに向かって来てるよね――――…？」

桃の言葉で全員が固まった。

そして自分たちの置かれている状況を再確認する…。

私はそこでふとあることに気がついた。

綾「そういえば…沢木さんは？」

桃「ママはトイレ行くって…。パパは車に煙草取りに行くって…。」

学「車…煙草…」

学の言葉で私はその場に凍りつく…。

綾「アレ…車って…駐車場…」

桃「駐車場…まさか…パパが…」

綾「どうしよう…あの黒い物体は尋常じゃものじゃないよ！！駐車場に近づいてるし…」

私がそう言った瞬間、桃は走り始めた。駐車場に向かって…

Page03 † 犠牲

学「待てよ！！桃！！

　おまえが行ってどうする？オヤジなら大丈夫だよ。」

そう言って学は桃を連れ戻す。

桃「でも…」

学「アレが危険なものならなおさら桃はここにいた方がいい。

　今の俺たちは何もできな…」

その時身も凍るような出来事が起こった。

？「キャ――――――――――――――！！！！！！！！！！！！」

駐車場の方から女の人の悲鳴が聞こえた。

人々は一斉に駐車場が見える高台へと集まり状況を理解しようとする。

私も高台へと向かった。

そして私は衝撃の光景を見てしまった…。

駐車場で黒いアレが何かに群がっている。

しばらくするとアレは群がるのをやめ、再び空へ上がった。

アレが群がっていた場所には、人間の骨だと思われる残骸が散らばっていた…

綾「嘘でしょ…一瞬で…」

その場に崩れそうになる私を学が支えてくれた。

人々は混乱し逃げまどう。

アレは今度はキャンプ場の方に近づいて来ていた。

学「綾、逃げるぞ。」

綾「うん…でもどこに…」

その時、私は見覚えのある人影とすれ違った。

綾「あの人は…」

私はとっさにその人を呼びとめた。

綾「ちょっと！！！！！待ってください。」

？「はい？」

綾「あなた…さっき駐車場で話してましたよね。

何か知ってるんじゃないですか？アレについて。」

綾は冷たく言い放つ。

綾が呼び止めた人物とは駐車場で話をしていた男の１人だった。

３０代半ばで『博士』と呼ばれていた男は「聞かれていたのか…」

っとつぶやいた。

男「私は風見という者だ。君たちもああなりたくなければ逃げなさ

い。」

綾「逃げ場がない。私たちはアレについて何も知らない。

あなたは知っているんでしょう？」

風見「……。ついて来なさい。」

私と学はお母さん桃、桃のママと合流し、風見についていった。

学「オイ…綾…なんなんだよあいつ。信用できんのかよ？」

小声で私に話しかけてくる。

綾「わからない。けど、私たちには今情報がない。あそこにいたら必ずアレにやられる。

それだったら、少しでも希望がある方に行った方がいいでしょ？」

学は黙り込んでしまった。何か考えるような表情をしている。

しばらく歩くと風見はある建物の前で足を止めた。

綾「あ…れ…？？？」

学「ここは…」

私たちが連れてこられたのは例の温泉施設だった。

綾「なんでこんな所に?！」

風見「ここの地下室にはシェルターがある。そこにいれば安全だ。」

綾「っ！！なんでこんなところにシェルターなんて物があるの！！

まるでこうなることを予想してたみたいに！！」

風見「……。」

綾「なんとか言いなさいよ！！！」

学「落ちつけよ、綾…。」

綾「私たちの他にもたくさんの人がここにはいるのに…

すでに犠牲者だって出てるのに…」

私の頬には涙が伝っていた。

そんな私に学は優しく頭をなでてくれる。

風見「行くぞ。」

風見の言葉で私たちは建物の中に入り、エレベーターに乗り込もうとした…。

その時私は気付いてしまったんだ。

いつのまにか桃がいなくなっていたことに…

Page04 † 桃

綾「あ…れ…？？？

桃は？！」

どこを見渡しても桃はいなかった。

学「！！

オイオイ…嘘だろ…こんな時に…！！」

ショックで桃のママはその場に座り込んでしまう。

綾「私探してくる！！」

そういって私は桃を探しに外へ出た。

アレがそこら辺にいるのに…私は桃のことで頭がいっぱいで周りが見えていなかった。

学「待てよ！！」

学もそう言って私を追いかけてきた。

綾「っ…桃……………」

私は温泉施設に向かう前に通った道を戻りながら必死に桃を探した。

半分ほど戻ってきたその時…

？「キャ――――――――――――――!!!!!!!!!」

綾「っ!!
　まさか…」

学「オイ…綾…今の声まさか…」

綾「行ってみよう…」

さっきの叫び声は確かに桃のものだと私は感じた。

でもそれを信じたくなかった。

“桃はまだ生きている。”

そう思って必死で叫び声のした方に向かって走った。

綾「ハァ…ハァ…

っ…桃…？？？？？」

学「…どこにいるんだよ――――…」

私たちはただひたすら走った。

桃が生きていることを願って…。

温泉施設からキャンプ場に続く坂道の手前まで来たとき…

学「オイ…綾…あれは――――…」

綾「！！　桃？！？！？！？！」

私たちが見たのは必死になってこっちに向かって走ってくる桃の姿だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2873e/

終わりなき

2010年10月17日02時27分発行